

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：12401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730205

研究課題名(和文)ニコラス・カルドアの経済思想 社会民主主義のヴィジョン

研究課題名(英文)Nicholas Kaldor's economic thought: his vision of democratic socialism

研究代表者

木村 雄一(KIMURA, Yuichi)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：80436740

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、ポスト・ケインジアンの一として、現代経済学の形成、イギリス労働党の政策実施、開発経済学等に多大な影響を与えたニコラス・カルドア(1908-1986)の経済思想を、以下の諸点から明らかにしたことである。(1) LSEにおける理論形成、(2) 第二次世界大戦後の福祉国家構想、(3) 発展途上国の開発経済理論・政策、(4) EC加盟論争とポンド切り下げ、(5) 支出税構想や選択的雇用税に関する政策、(6) ケンブリッジ学派の経済成長・所得分配に関する理論的貢献と政策、(7) 成熟化したイギリス経済への処方箋、(8) フリードマンのマネタリズムや均衡経済学批判、(9) 社会民主主義のヴィジョン。

研究成果の概要(英文)：This research deals with Nicholas Kaldor's economic thought from the point of the following points: (1) his contributions toward pure economic theories such as the cobweb theory, imperfect competition, general equilibrium, Hayek's trade cycle, Keynesian economics etc., (2) creating the vision of the welfare economic world, (3) his contribution toward development's economic theories, (4) opposing british entry into the Common Market such as E.C. and on monetary unions, (5) the expenditure tax and the selective employment tax, (6) his new approaches to growth and distribution theory in Modern Cambridge School, (7) the watershed of Kaldor's inaugural lecture 1966, Kaldor's laws from the Verdoorn and A. Young, (8) supposing economics without equilibrium, and opposing against Monetarism, (9) his view of democratic socialism.

研究分野：現代経済学・経済思想史

キーワード：カルドア LSE ロビンズ ケンブリッジ 成長と分配 技術進歩 労働党 ロビンソン

1. 研究開始当初の背景

申請者の研究の全体構想は、20世紀のイギリス内外に多大な影響を与えたニコラス・カルドアの経済理論と経済政策、ひいては社会ビジョンともいふべき経済思想を明らかにすることであった。カルドアは、現代経済学において今なお重要な人物の一人である。なぜならば、「ゆりかごから墓場まで」を唱道したウィリアム・ベヴァリッジと協同して、福祉国家政策を掲げたり、ジョーン・ロビンソン、リチャード・カーン、ピエロ・スラッファとともにイギリス・ケンブリッジ学派の先導的役割を担ったり、ポンド切り下げや選択的雇用税、そして支出税といったイギリス労働党の政策立案や開発途上国に対する立案をなしたり、フリードマンらマネタリズムや新古典派経済学を鋭く批判したり、サッチャー政権を批判したりと、現代経済学における彼の様々な貢献は枚挙に暇がないからである。さらにカルドアは、1930年代のLSE(ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス)でライオネル・ロビンズやフリードリッヒ・ハイエクの指導を受けて、くもの巣理論、不完全競争や過剰能力、主観的需要曲線といった純粋理論への数多くの貢献をなしたことを見るならば、LSEとケンブリッジの架橋的存在として重要な鍵を握る人物である(キーパーソン)。

カルドアの経済思想についての研究は、King(2009), Targetti(1992), Thirlwall(1987), Turner(1993)の代表的な著作がある。それらの著作で、カルドアの理論や政策の概要は明らかになっているが、カルドアの経済思想面については、「フェビアン社会主義」との関係や「急進的な社会民主主義」と指摘されるに留まっている。また国内にカルドアの評伝や紹介の研究はあるものの(cf. 根井1989)、一冊のまとまったカルドア研究は皆無である。

<引用文献>

- King, J.E. (2009) Nicholas Kaldor. New York: Macmillan.
- Targetti, F. (1992) Nicholas Kaldor: The Economics and Politics of Capitalism as a Dynamic System, New York: Oxford University Press
- Thirlwall, A. P. (1987) Nicholas Kaldor. Washington Square: New York University Press.
- Turner, M. S. (1993) Nicholas Kaldor and the Real World. New York: M. E. Sharpe.
- 根井雅弘(1989)『現代イギリス経済学の群像 正統から異端へ』岩波書店。

2. 研究の目的

本研究の目的は、緒に就いたばかりのカルドアの経済思想を、彼の経済理論や経済政策

をもとに、できるかぎりその輪郭を描き出し、そのビジョンを掴むことである(カルドアは、ハイエクやケインズと違って、社会哲学に関する論文を書いておらず、政策的な論文や理論的な論文がほとんどであるため、このような表現になっている)。LSEやケンブリッジの第一次資料に基づく知的交流や思想史の観点から、カルドアの経済思想を深く研究する必要性は存在する。さらにケンブリッジ時代のカルドアは、LSE時代の研究業績、ケンブリッジのジョーン・ロビンソンやリチャード・カーン、ピエロ・スラッファ、ひいてはオックスフォードのロイ・ハロッドやジョン・ヒックスと対照して扱う必要がある。<1. 研究開始当初の背景>でも言及したように、国内ではカルドアの経済思想をテーマとする研究書は皆無である。以上から、カルドア研究は新規性と独創性を有し、潜在的で開拓余地のあるテーマの一つとして位置づけられる。

3. 研究の方法

本研究は具体的に以下の項目に分けられる。

- (1) ハンガリー、ドイツ、LSEにおけるカルドアの活躍 ジャーナリスト、純粋理論の研究
- (2) 第二次世界大戦中のケンブリッジのLSE時代におけるカルドア 応用経済学と福祉国家
- (3) 戦後の新国際秩序におけるカルドアの活躍 - 開発経済学と経済成長、農業 - 産業モデル
- (4) カルドアと労働党の経済政策 - ポンド切り下げ、選択的雇用税、支出税
- (5) 戦後のケンブリッジ学派の成長・分配・所得理論のカルドア - ジョーン・ロビンソン、リチャード・カーン、ピエロ・スラッファ、ロイ・ハロッド、ジョン・ヒックスとの知的交流
- (6) カルドアと成熟化したイギリス経済問題 - 産業硬直、経済成長率の鈍化、EC加盟論争
- (7) カルドアのマネタリズム・新古典派経済学批判 - ミルトン・フリードマンや均衡経済学
- (8) カルドアと社会民主主義のビジョン - 現代イギリス史を通じて

本研究の手法は、以上の項目を中心に、内外のカルドアの論文・関連論文等をすべて調査すること、そして一次資料としてケンブリッジ大学所蔵の「カルドア文書」を用いて、LSEやケンブリッジ大学の図書館を中心に文献渉猟を行うことで、これまで研究があまりなされてこなかったカルドアの経済思想の本質を掴むことであった。

4. 研究成果

本研究の成果として、< 5. 主な発表論文等 > で記載した発表論文や学会報告を通じて、大まかに次の三点の結果が得られた。
(1) カルドアの経済理論と経済政策ばかりでなく、カルドアの社会ヴィジョンが明らかになったこと。これは、「社会民主主義者」と指摘されるに留まるカルドアの経済思想に対して、経済学史や経済思想史におけるカルドアの位置が明確となった点で、重要な意義を与えたと言える。

(2) LSE とケンブリッジの架橋的存在であるカルドアの全体像を明らかにすることによって、LSE とケンブリッジの学問的状況が明らかになったことである。カルドアは、LSE とケンブリッジのキーパーソンとして位置付けているが、両学府の包括的な研究成果に一石を投じ、新たな知見が得られた。

(3) カルドアの社会民主主義のヴィジョンが明らかになったことで、第三の道やニューレイバーという現代のイギリス史や政策思想に連なる重要なアイデアを検討する題材を与えることができたことである。経済学史や経済思想といった狭義の研究領域にとどまらず、社会科学全体を考えるうえで、カルドアの知的貢献が重要であることが確認できた。

また< 5. 主な発表論文等 > に掲載していない研究成果(論文・著書)については、現在公刊準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

木村雄一

「J. ヴァイナーと費用論争」『埼玉大学紀要教育学部』64(1)、pp.117-132、2015年。査読無。

木村雄一

「ロビンズとカルドアにおける経済理論と企業の理論」『埼玉大学紀要教育学部』63(2)、pp.111 - 136、2014年。査読無。

木村雄一

「N. カルドアと支出税 J.S.ミルと J.M.ケインズを通じて」『一橋大学社会科学古典資料センターStudy Series』69、pp.1-34、2014年。査読無。

木村雄一

「初期カルドアと投機・利子・経済安定」『埼玉大学紀要教育学部』63(1) pp. 221 - 240、2014年。査読無。

木村雄一

「N.カルドアとマネタリズム」『埼玉大学紀

要教育学部』62(1) pp. 203-214、2013年。査読無。

木村雄一・瀬尾崇

「N.カルドアの農工二部門モデルの再検討モデルの意義と政策」『埼玉大学紀要教育学部』61(1) pp. 183-199、2012年。査読無。

木村雄一

「ライオネル・ロビンズと文化政策 芸術行政の参与と「ロビンズ・プリンシプル」」『文化経済学』9(1) pp.33-42、2012年。査読有。

[学会発表](計 8 件)

木村雄一

「ニコラス・カルドアと経済成長・所得分配・支出税 - 経済思想からのアプローチ」現代経済理論研究会、石川四高記念文化交流館(石川県・金沢市)、2015年3月2日。査読無。

木村雄一

「ロビンズ VS. ケインズ」ケインズ学会第四回年次大会立教大学(東京都・豊島区)、2014年11月30日。査読無。

Yuichi KIMURA

“N. Kaldor on Expenditure Tax: Through J.S. Mill and J. M. Keynes” The 18th ESHET annual conference, Lausanne, Lausanne University, 2014.5.30. (スイス) 査読無。

木村雄一

「N. カルドアの税制改革と経済成長・分配」進化経済学会第18回全国大会金沢大学(石川県・金沢市)。同報告論文は『第18回進化経済学会論文集』pp.1-18。2014年3月15日。査読無。

Yuichi KIMURA

“Round Table: On The Return to Keynes Translated” The 10th International Keynes Conference, Tokyo, Hitotsubashi University, 2014.3.17。査読無。

木村雄一

「カルドアの支出税と社会ヴィジョン ケインズの金利生活者の安楽死と比較して」第3回ケインズ学会専修大学(東京都・千代田区)、2013年12月7日。査読無。

瀬尾崇・木村雄一

「技術変化の長期的プロセスとシュンペーター的失業理論」進化経済学会第16回全国大会名古屋大学(愛知県・名古屋市)、2011年3月。同報告論文は『進化経済学第16集』pp.1-10。査読無。

木村雄一

「ライオネル・ロビンズと文化政策 芸術行政の参与と「ロビンズ・プリンシプル」」
2011 年度文化経済学会<日本> 名古屋大学
(愛知県・名古屋市) 2011 年 7 月 3 日。同
報告の要旨は『文化経済学会大会報告予稿
集』 pp.62-63。査読無。

〔図書〕(計 1 件)

木村雄一「翻訳：第 10 章ケインズとスラ
ッフア，そして後者の「隠された懐疑」(ハ
インツ・D・クルツ)、ブラッドリー・ペイト
マン、平井俊顕、マリア・クリスティーナ・
マルクッツオ編著『リターン・トゥ・ケイン
ズ』東京大学出版会、2014 年。

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木村 雄一 (KIMURA, Yuichi)

埼玉大学教育学部・准教授

研究者番号：80436740

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：